

近代日韓における金正喜認識 - 藤塚鄰の金正喜研究 と『阮堂先生全集』刊行を起点として

その他のタイトル	Evaluations of Kim Jeong-hui in Modern Japan and Korea -Focusing on Fujitsuka's research about Kim Jeong-hui and publishing of The Complete Collection of Wandang
著者	李 曉辰
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	7
ページ	289-303
発行年	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/8284

近代日韓における金正喜認識

——藤塚鄰の金正喜研究と『阮堂先生全集』刊行を起点として

李 暁 辰

Evaluations of Kim Jeong-hui in Modern Japan and Korea

— Focusing on Fujitsuka's research about Kim Jeong-hui and publishing of *The Complete Collection of Wandang*

LEE Hyojin

Fujitsuka's research on Kim Jeong-hui had an unintentional and profound influence on many Japanese and Korean scholars at the time. Accepting Fujitsuka's opinion, they re-evaluated the classicist Kim Jeong-hui or analyzed him as a scholar of Confucian classics. There was also a movement in reaction to Fujitsuka's approach that evaluated Kim from completely new perspectives. Fujitsuka was a pioneer in research not only in the field of Chinese philosophy, but also in the research of Kim Jeong-hui from the multifaceted perspective of Korean philosophy, literature, and the arts. In 1934, *The Complete Collection of Wandang* was published by Kim Ik-hwan who was Kim Jeong-hui's descendent. Jeong In-bo (1893-1950) who was a very famous scholar in Korean studies wrote the foreword, and he complained that some people regarded Kim Jeong-hui was only a master of Evidential Learning (Gaozhengxue) which in fact was criticism against Fujitsuka's works. These points of view on Kim Jeong-hui influenced the narratives of history of Korean Confucianism. There isn't any mention of Kim Jeong-hui in *The Origin of Korean Confucianism* published in 1922. In 1949, however, in the *History of Chosun Dynasty Confucianism* explained that Kim Jeong-hui is one of the important Confucian scholar of late Joseon Dynasty. Through these debates between the scholars of Korea and Japan during the Colonial Period of Japan, Kim Jeong-hui gradually gained the reputation as both scholar and calligrapher.

キーワード：金正喜 藤塚鄰 阮堂先生全集 近代韓国儒学 清朝考証学

はじめに

金正喜（号阮堂・秋史、1786-1856）は、朝鮮末期の儒学者・金石文研究者・文章家・書家として広く知られている。彼は、韓国の現代教科書にしばしば載せられる「歳寒図」（国宝180号）の作家でもある¹⁾。

1) 韓国文人画の代表的な作品である「歳寒図」は、金正喜が濟州島に流配された時、遠方まで会いに来てくれた弟子

彼が研究対象として注目されたのは、近代に入ってからである。東洋史学者の稲葉岩吉は、1911年5月に「金秋史及び阮堂集」という短文を書き、『阮堂集』に基づいて金正喜を紹介したことがある²⁾。しかし、本格的に金正喜が注目され始めたのは、1920年代後半から1930年代のことである。この時期にかけて、全集の刊行や研究論文の発表、展覧会まで多様な分野において金正喜が注目され始めた。1934年には、金正喜の後孫の翊煥により『阮堂先生全集』が刊行され、1936年には京城帝国大学の支那哲学講座の教授であった藤塚鄰が論文「李朝における清朝文化の移入と金阮堂」で東京帝国大学博士号を取得するなど、著しい成果が見られる。藤塚の博士論文は金正喜をテーマとして書かれた初めての学位論文でもあった。

藤塚は金正喜研究の大家であり金正喜を再発見した人物として知られている³⁾。藤塚は1926年から1940年まで京城帝国大学の支那哲学講座の教授として在韓した人物で、『論語』や日清鮮の交流に関する著作を多数残した。金正喜が清朝の著名な考証学者である阮元、翁方綱と親密に交流していたことなどを考えると、考証学の影響を受けていた藤塚にとって、金正喜の存在は大変興味深い研究対象であったに違いない。

藤塚が行なった一連の金正喜研究は、韓国および日本の各界各層から関心と反応を引き起こした。そして、『阮堂先生全集』出版その他に代表されるこの時期の金正喜への関心と論議が、現在の金正喜に対する認識にまで継承されているのである。しかし、具体的にどのような過程を経て金正喜に対する認識が形成されていったのか、また、その流れの中で藤塚の金正喜研究が持つ意義は何であるのかについては、いまだ明らかになっていない。そこで、本論稿では、朝鮮後期の儒学者、金正喜が日本人と韓国人の学者たちによってどのように評価され、位置づけられたのかについて明らかにしたい。

一、『阮堂尺牘』『覃孿齋詩藁』『阮堂集』から見る金正喜の学問と書法

金正喜（1786-1856）は、韓国の忠清南道礼山郡出身で、本貫は慶州である。父魯敬（1766-1837）と師の朴齊家（1750-1805）に学び、1809年には司馬試に合格して生員になった。同年12月父魯敬が冬至副使として燕京に行くことになり、子弟軍官の資格で父と一緒に燕京へ向かった。そこで金正喜は、翁方綱や阮元のもとを訪ねて子弟義を結び、帰国後も手紙を通じて継続的に交流している。

1813年（28歳）には、『伴圃遺稿拾遺』⁴⁾の序文を書き、1818年（33歳）には、優れた楷書体で「伽倻山海印寺重建上樑文」を書くなど、すでに30歳前後から文章家・書家としてその名を知られていた。1816

の李尙迪（1804-1865）のために描き与えたものである。李尙迪は清朝を訪ねる際にそれを持って行き、清朝の名士たちはそれに跋文を書いた。現行の中等美術教科にも紹介されている（『美術』（株志学社、210頁）。

2) 『朝鮮』第39号（日韓書房、25-29頁）。また、同年の10月には日本で発行された雑誌『東洋学報』に金正喜について紹介した（「金秋史について」第1巻第2号（東洋文庫、77-79頁）。

3) 藤塚の弟子の加藤常賢は、藤塚に対する既存のイメージ（阮堂研究者・朝鮮学者）に抗議し、藤塚は「清朝経学の実事求是を主軸とする考証学者である」と主張したこともある（加藤常賢「跋」『清朝文化東伝の研究』（国書刊行会、1975年）528頁）。

4) 朝鮮後期の詩人金光翼の作品を子金載明が編纂した詩文集『伴圃遺稿』（1778年）の増補版。

年（31歳）には、翁方綱の經学觀に、阮元の徹底的考証学經学觀を整理・総合して「実事求是説」を著述し、新しい經学觀を提示した。また、同年無学大師の碑石とされていた「ソウル北漢山新羅真興王巡狩碑」（現国宝第3号）を考証した。晩年には政治的事件に関わり、濟州島に配せられるが、そこで独自の書体である「秋史体」を完成させた。弟子の李尚迪に「歳寒図」を描き与えたのもこの時期であった。金正喜の書と文人画としての「歳寒図」は、現在も高く評価されている⁵⁾。

金正喜は、生前ほとんど著作を公にしなかった。金正喜の死後、彼の才能を惜しんだ文人たちが、金正喜の遺稿を刊行したのである。金正喜の著作出版に深く関連したのが、南秉吉（1820-1869）である。彼は金正喜の友人であった南秉哲（1817-1863）の弟で、朝鮮後期の天文学者・暦法学者であった。南秉吉は『阮堂尺牘』の序文において、金正喜の翰墨を好み、1867年の夏から冬の間金正喜の手紙を収集・刊行したと記している⁶⁾。

南秉吉は、集めた手紙と文章を整理し、1867年に『阮堂尺牘』と『覃孳齋詩藁』を刊行した⁷⁾。その翌年には、閔奎鎬（1836-1878）がこれらに収録されていない資料を集め、南秉吉と協力して既存のものと同本して『阮堂集』を刊行した。金正喜が逝去してから10年後、3種類の詩文集が出版されることとなったのである。

南秉吉は『阮堂尺牘』の序文「阮堂尺牘序」において、金正喜の書体と学問について次のように評価している。

余答曰以若先生学識、伝于世者幾何也。詩存畧干、文亦罕伝、而惟是尺牘、雖云咳唾之余、或論經史百家古文詩詞、或証仏老金石楷隸名物、出古入今、卓然孤詣、香象文豹奔走隱映於楮墨之間、文章典型⁸⁾。

この文章は、南秉吉が金正喜の尺牘を出版しようとしていた時、夢の中で金正喜に告げた言葉だという。南秉吉は、金正喜が經史・百家・古文・詩詞を論じ、老仏・金石・楷隸・名物などを考証し、きわめて精密博大であると評価し、「文章の典型」を見ることができると礼賛している。

次に、申錫禧（1808-1873）の「覃孳齋詩集序」を見てみよう。

阮堂公詩文、故卓然大家、以工書名天下、為其所揜云。余少日借讀公詩、始信公之可伝者、不第以書名。……彝齋樞相公論公書曰、阮堂濟州以後書、如子美夔州以後詩、子厚柳州以後文。余則曰詩亦如其書、其靈警悟入之妙、自有神出古異、澹不可収者矣⁹⁾。

5) これらのことについては、民族文化推進会編『国訳阮堂全集Ⅳ』（ソウル：民族文化推進会、1986年、5-9頁）を参照。

6) 「余嘗竊慕金公阮堂所為翰墨。蓋其精華溢於辭表。神妙動於墨痕。有足以撼發人之文心。…余於丁卯夏。无妄一疾。徂冬淹蟄。思所以妄疾之方。收輯公之書尺。將擬擺印。」

7) 河恵丁「秋史 著作의 板本 研究」（『史学研究』第87号、韓國史学会、2007年9月）。

8) 金正喜著、南秉吉編『阮堂尺牘』「阮堂尺牘序」（1867年）。

9) 金正喜著、南秉吉編、『覃孳齋詩藁』申錫禧「覃孳齋詩集序」（1867年）。

申錫禧は、金正喜は詩文の大家であったが、書家としての名声に遮られていることを惜しがっている。このことから、金正喜は当時すでに書家として広く世間に知られていたことがわかる。申錫禧は金正喜の詩文が彼の書と同じように高邁な水準に達していることを強調し、朝鮮の文人たちが金正喜の詩文を読むべきだと勧告している。

最後に、『阮堂集』に掲載されている閔奎鎬の「阮堂金公小伝」を取り上げてみる。

甫弱冠、貫徹百家之書、宏深弘博、淵乎若河海之不可量也。専心用工、在十三經、尤邃於易、金石
 圖書詩文篆隸之学、無有不窮其源、尤以書法聞天下¹⁰⁾。

閔奎鎬は金正喜が百家の書を涉獵していたこと、儒教の經典とりわけ『易経』に通曉していたことを述べ、その学問の広さと深さを「河海」のようだとした。また、金石・圖書・詩文・篆隸を極め、書法でも天下に名を知られていたと評価している。

以上をまとめると、当時の金正喜に対する評価は、儒学的知識はもとより、老莊思想および仏教思想にまで博学な知識を持っていた人物であり、特に書法においては抜きん出たとされている。また、このような金正喜の姿が世間ではあまり知られていないことを惜しんで、文集の編纂によって金正喜の文章と学問を伝えたいという趣旨が読みとれる。

二、藤塚鄰の金正喜研究と韓国儒学認識

藤塚は1879年、岩手県で生まれ、1908年7月、東京帝国大学の哲学科（支那哲学専修）を卒業した。その後、名古屋の第八高等学校教授を経て、1926年4月、初代総長の服部宇之吉の推薦を受け、京城帝国大学発足とともにその教授となる。1930年（昭和5年）9月には京城帝国大学法文学部長となり、1940年（昭和15年）4月に京城帝国大学を退いて日本に戻り、同年11月に名誉教授を授与されるなど、京城帝国大学において大きな影響力を有した人物である¹¹⁾。

藤塚は、京城帝国大学に赴任する以前、官命により、清朝經学研究のため1921年10月から一年半ほど中国に在留したことがある。北京留学時代に藤塚は北京の琉璃廠書肆で多様な専門書籍に接し、中国の学者らとも交流していた¹²⁾。

ところが、中国哲学研究者として来韓した藤塚が取り組んだのは、朝鮮時代の儒学者金正喜に関する研究であった。藤塚は、清朝考証学の立場から金正喜を再評価し、それらをまとめた論文「李朝に於ける清朝文化の移入と金阮堂」によって、東京大学の文学博士学位を取得した。この論文は18・19世紀の東アジアにおける学術的文化交渉研究ともいえるものである。

10) 金正喜著、閔奎鎬編、『阮堂集』閔奎鎬「阮堂金公小傳」（1868年）。

11) 李曉辰「京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰」『東アジア文化研究科院生論集』創刊号、（関西大学東アジア文化研究科、2013年1月）

12) たとえば、『魯迅日記』の写真にも藤塚の姿を確認することができる（「座談会 先学を語る——藤塚鄰博士——」、『東方学』第69号、東方学会、1985年）。

藤塚の金正喜に対する関心は、金正喜の師である朴齊家（1750-1805）から始まった。前述したように、清朝經学研究のために北京を訪問していた藤塚はある日、琉璃廠書肆で朴齊家に関する記録を発見したが、その以上の資料を北京で得ることはできなかった。しかし、1926年藤塚は朝鮮に拠点を移したことにより、再び朴齊家の名前を発見することになる。

一日翰南書林に過ぎつて、何心なく「四家詩」なる一小冊子を挙げて見ると、はからずも巻頭「朴齊家」の三字を発見し、驚喜措く能わず、久しく脳裡に印せし彼の名は、勃焉として蘇った。就いて検するに、彼は、李徳懋・柳得恭・李書九と相並んで四家と歌はれた新興学人なるを知った。しかもその書には、清の李調元・潘庭筠二名賢の序があり且つ批評な施してある。余は始めて朴齊家の非凡の英才たるを認むると同時に、李朝人と清儒との間における学縁の浅からざるを知り、異常の興味を唆られ、先づ齊家に関する資料の蒐集に努めたが、その詩集・文集・北学議等ぞくぞく入手、殊に彼と清儒との間に往来した詩文尺牘を編せる縞紵集二冊を獲、羅聘絵く所の齊家の小照さえ手に帰するに及んで、齊家の全貌宛然観る如く、それに関聯して、彼の同輩李徳懋・柳得恭はもとより、その先輩たる洪大容等幾多の学人が入燕して清儒と交契せる場面が燦として展開せられ、彼我の間に贈答往復せる書籍尺牘積集し、清朝文化東伝の逕路歴々徴すべきに至った¹³⁾。

このような朴齊家に対する藤塚の興味は、やがてその弟子金正喜にまで及んだ。

殊に朴齊家の弟子にして、李朝五百年來稀に見る英物阮堂金正喜の出現し、ひとたび入燕して翁覃溪・阮芸台二経師の知を受け、諸名賢と往来し、清朝学の核心を捉らへて帰東するや、半島学界は、実事求是の学を以て急角度に進展し、五百年來未だ見ざるの新生面を露呈した。

曩に李朝学壇を目して、宋明末疏の学問以外何物も留めずとなし、清朝文化の如き、殆どこれを認めなかった論者の一孔の見なきを知るとともに、この重大な問題の研究の緊要事たるを痛感し、一面清朝經学研鑽な畢生の目的とする自分の当然な義務なりと信じたが故に、過去十年間、苦心惨憺、極力資料の蒐集を図り、その結果、書籍千余卷、尺牘書画拓本類千点に達した。未だこれをもって足れりとするわけではないが、まづこれらの資料に拠り、殊に清朝学大成の第一人たる金阮堂を中心として、李朝に於ける清朝文化移入の跡を研覈し、具に彼我学人の接触交契を説き、文籍拓本の東伝西寄を叙し、従来殆んど顧みられなかった李朝学壇の尊き一面を顕彰すべく企図しつつある。本論文は実にこの意図の下に撰述したもので、他日の完成に待つ清朝文化東漸史の根幹をなすものである¹⁴⁾。

藤塚は、金正喜が清まで足を運び、考証学の最高権威者である阮元や翁方綱と直接に交流し、対等に知的交流を行っていたことを知り、金正喜と阮元との深い関係に興味を持ち始めた。藤塚は金正喜に

13) 藤塚鄰「導言」『清朝文化東伝の研究』（国書刊行会、1975年）3-4頁。

14) 藤塚鄰「導言」『清朝文化東伝の研究』（国書刊行会、1975年）4頁。

ついて研究を進め、やがて清朝文化東漸史における金正喜の重要性を認識し、彼を「清朝学大成の第一人」と称するに至ったのである。

また、藤塚が金正喜の研究に取り組んだ背景にはもう一つ重要な理由がある。それは、金正喜と日本の関係である。藤塚は、調査過程において、金正喜が日本の書物にも触れており、これを深く理解していたことを知った。

翻つて惟ふに、朝鮮の通信使金竹里一行の対馬に於ける接見は、実に、其の翌年行はれ、李太華贈る所の酉堂の詩冊が、特に林述斎に賞歎されたことは、序言既に述べた所である。而かも此の一行によって将来された邦儒の作品は、端なくも新帰東の阮堂の眼に触れて、其の絶讃を博し、由つて以て日本の文化価値が、阮堂を通して、半島学壇に了解される契機となったことは、如何にも奇しき因縁と謂はねばならぬ。後年燕行学人が屢々日本の文籍を攜行したのも、茲に一素因を持って居たのである¹⁵⁾。

藤塚は、阮元・翁方綱——金正喜——林述斎・松崎慊堂という一見接点のない三国の儒学者が、金正喜を中心として結ばれていたことに大きな衝撃を受けた。

曩に述斎や慊堂が切に知らうとして知り得なかった、李朝に於ける清朝文化東漸の波濤は、今や酉堂の子阮堂の新帰東によって漸く滔天の勢を見せ、而して阮堂其の人は、精里を欽し、橘園を慕ひ、渺々綿々として懐を対州会見の諸公に寄せ、新に日本文化の精華を見直さうとして居たのであつた。彼等の間には、仮令面識交歓の機会はなかつたにせよ、冥々の裡、血版相搏ち、呼吸相通ふ何物かが、潜流しつつあつたことを認めねばならぬ。かくて対州の一角に於て投ぜられた一石は、一波又一波、千波万波な畳んで竟に百有余年の今日、澎湃たる大海原を、眼前に展開するやうになつた。古な按じ今を撫し、感慨無量である¹⁶⁾。

こうして藤塚の研究により、金正喜が中国—韓国—日本を結ぶ清朝文化東漸の大きな波を起こした人物であつたことが明らかになる。これは、10年間の努力と執念の成果であつた。研究を進める過程で、藤塚は阮堂という人物に魅了されるとともに、朝鮮儒学を再認識するたとえば、『魯迅日記』の写真にも藤塚の姿を確認することができるに至つたのである。

阮堂は、正しく李朝五百年の学壇に於ける超絶的存在であつた。真に清朝文化の核心を把握し、深く経学の堂奥に詣り、新に実事求是の学を半島に唱明して、宋明末疏の弊に墮した褊狭枯槁の陋風に巨弾を投じ、奕奕たる一生面を展開した偉大なる学績に至つては、阮堂は正に其の第一人者と

15) 藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』(国書刊行会、1975年) 136頁。

16) 藤塚鄰「導言」『清朝文化東伝の研究』(国書刊行会、1975年) 144頁。

謂はなければならない¹⁷⁾。

藤塚は金正喜を通じて、当時日本人学者たちに広く信じられていた「朝鮮儒学は中国の朱子学に他ならない」という偏見に疑問を抱いた。それから、藤塚は手紙など関連資料を着々と集め、学界で発表した。また、鮎貝房之進・稲葉岩吉・孫在馨などと共に集めた資料を1932年ソウルの三越ギャラリーにおいて展示したこともある¹⁸⁾。このような努力の結果、金正喜が日本に先立って『皇清経解』を手に入れた人物であると、当時朝鮮には金正喜を軸とする実事求是の学が盛んになっていたことが解明された¹⁹⁾。

藤塚のこのような金正喜に対する認識と評価は、金正喜の清朝考証学の大家としての姿を究明しただけではなく、朝鮮儒学史に対する新しい接近と理解という面でも、その意義があったといえよう。博士論文の審査委員であった宇野哲人（1875-1974）が藤塚の論文について「之を要するに本論文は清朝學術の造詣深き著者が従来専ら朝鮮金石学者として知られたる金正喜の実は清朝學術の精髓に通暁したる經学の大家なることを論定し、李朝五百年の文化史上、従来未だ曾てしられざりし方面を闡明したるものなり」²⁰⁾と述べた審査評は、まさにその意義を明らかにしたものである。

三、金正喜認識の拡大と『阮堂先生全集』の刊行

1. 多様な分野における金正喜認識

藤塚の金正喜研究は、1929年発表した「李朝の学人と乾隆文化」²¹⁾を始めとし、多数の関連論文を発表しているが、それ以外にも授業で取り上げるなど、1930年代にかけて集中的に行われた。そして、金正喜に対する関心が高まっていくのも、この時期であった。しかし、最初その関心は主に書画と経学に関するものであった。

近代韓国の知識人崔南善（1890-1957）は、「朝鮮歴史講話（50）一四九、書画」²²⁾で金正喜について触れている。崔南善は史学者・作家・文化運動家として活動した文人で、雑誌『少年』と新聞『時代日報』を発刊するなど、近代期の知識と情報伝達に力を注いだ人物である。「朝鮮歴史講話」は、1930年1月12日から3月15日まで『東亜日報』に連載された韓国史の概説である。

崔南善は、「朝鮮歴史講話」で金正喜の書について紹介し、「秋史体」という書体を紹介している。

純祖朝に金秋史（正喜又号禮堂阮堂）が出て抜群の才能に絶倫の工夫を積み、鐘鼎、碑帖の学を磨いて識見が高邁である。朝鮮の書道に至っては独特な地歩を得た感があり、その漢魏の韻と晋唐の

17) 藤塚鄰「序言」『清朝文化東伝の研究』（国書刊行会、1975年）72頁。

18) 「阮堂遺墨遺品の展覧」（『青丘学叢』第十号、青丘学会、1932年）175-181頁。

19) 藤塚明直「『皇清経解』と秋史」（『秋史研究』第4号、秋史研究会、2006年）83頁。

20) 宇野精一「序にかへて」藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』（国書刊行会、1975年）2頁。

21) 『朝鮮支那文化の研究』（京城帝国学会法文学会第二部論纂第一輯、刀江書院、1929年）

22) 『東亜日報』1930年3月14日、4面（原文は韓国語）。

法を融合して独創的な工夫を発揮したため、世に秋史体と呼ぶ²³⁾。

さらに、文末に注をつけ、「秋史は書だけではなく、金石博古の学に通じており、また清の巨儒阮元翁方綱と交遊して経術その他に深い造詣を持っていた²⁴⁾と説明を加えている。すなわち、崔南善は金正喜を主に「書家」として評価しているが、清の巨儒たちと交流するほどの深い経学理解があったことにも注意を喚起している。

しかし、ほぼ同じ時期に書かれた金台俊の「朝鮮小説史」には、清朝考証学に関する言及はあるものの、藤塚がその第一人者と強調した金正喜については注意していない。これは儒学史ではないが、1930年10月31日から『東亜日報』に連載されたもので、文学が発展する社会的背景として、思想にも触れられている²⁵⁾。著者の金台俊は、京城帝国大学で朝鮮語学・朝鮮文学を専攻し、明倫学院および明倫専門学校の講師を歴任、韓国人として初めて京城帝国大学法文学部の講師になった人物である。文学を研究していたが、漢学への理解も深い人物であった。そのため、朝鮮小説史を述べつつも、当時の歴史的・思想的風潮にも通じていたのである。

この「朝鮮小説史」の第39編「英正時代の小説(一)」²⁶⁾では、英正期に李朝文芸が最も盛んであったとし、その一つの理由として清朝考証学の「実事求是」学風の影響と、経済(経国済民)の学風の流行を挙げている。ところが、彼は清朝の学問に明るかった人物として李徳懋、柳得恭、そして朴齊家を例として挙げているが、「実事求是説」を著わした金正喜については触れていない。

ここからもわかるように、当時、金正喜の存在は、まだ韓国の儒学史および漢学史では定着していなかった。いち早く金正喜に注目していたのは、韓国の芸術界であった。前述した1932年ソウルの三越ギャラリーにおける阮堂遺墨遺品の展覧会だけではなく、同年朝鮮美術館で開催された、第三回朝鮮古書画珍蔵品展などにも金大鉉、孫在馨などの韓国人の収蔵家が出品した金正喜の作品が多数展示された²⁷⁾。金正喜の作品を集めていたのは、韓国人だけではなく、藤塚もソウルの仁寺洞の古本屋によく足を運び、金正喜作品の価値を上げたのは藤塚だという話があるほど、金正喜の作品を大量に集めていたのである²⁸⁾。

金石学の分野でも金正喜は朝鮮の重要な金石学者として認識されるに至った。朝鮮の金石を網羅した『朝鮮金石攷』(大阪屋号書店、1935年)の著者葛城末治は、金正喜について以下のように述べている。

23) 原文は次の通りである。「純祖朝에 金秋史(正喜又号禮堂阮堂) | 나서 出人の才調에 絶倫의 工夫를 싸코 鐘鼎, 碑帖의 學을 다가서 識見이 高適하니 朝鮮의 書道 | 에 이 르리 独特한 地歩를 이룬 觀이 잇스며 그 漢魏의 韻과 普唐의 法을 融合하야 獨到한 工夫를 發揮한 것을 世에서 秋史體로써 일컫는다」。

24) 原文は次の通りである。「秋史는 書뿐이 아니라 金石博古의 學에 精하고 또 淸의 巨儒 阮元翁 方綱과 交遊하야 經術其他에 기 淸造詣를 가졌었다」。

25) 1933年に単行本『朝鮮小説史』(清進書館)として出版された。

26) 『東亜日報』1931年1月16日、4面。(韓国語、筆者訳)

27) 吳鳳彬「朝鮮古書畫珍蔵品 展覧會를 열면서(朝鮮古書畫珍蔵品 展覧會を開きながら)」(『東亜日報』1932年10月3日)4面。

28) 유홍준『완당평전(阮堂評伝)』1、한고재、1991年、59頁。

半島金石に留意し著名なのは、金在魯と金正喜との二人を挙げべきであらう。……正喜は正祖の時の人、阮堂又は秋史と号し、晩年に老果といひ、其の著に阮堂集・礼堂金石過眼録及び阮堂尺牘などがあり、半島に於ける著名なる金石は概ね探訪過眼し、精密なる考証を遺せるものが尠くない。近代に於ける斯学研究の第一人者である。又清人翁方綱（覃溪と号す）とも後学として交遊があり、屢々朝鮮金石に就いても論談している²⁹⁾。

こうして金正喜に対する関心は徐々に高まり、1933年には、経学者として北京でも名を知られていた金正喜を記念してその出生地である礼山君新岩面に碑を建てようとする動きもあった³⁰⁾。

2. 『阮堂先生全集』の刊行

1934年には、金正喜の後裔の金翊煥が既存の『阮堂尺牘』『覃壻齋詩藁』『阮堂集』を整理・総合して『阮堂先生全集』を出版した。1929年の『星湖僊説』の出版³¹⁾や、鄭寅普が1934年から『与猶堂全書』の出版計画に着手したことから、『阮堂先生全集』の刊行が、いわば「朝鮮学運動」³²⁾の雰囲気と関連していることがわかる。この全集の発行は、金正喜に対する認識を広める同時に、その後の金正喜の研究に重要な資料となった。

巻頭には、金甯漢（1878-1950）と鄭寅普（1893-1950）の序文が載っている。二人が書いた序文にはともに、当時の金正喜認識に対する不満が表われている。世間における金正喜に対する評価と称賛は、ただ一部の側面（書体・考証学）だけに集中しているのみで、本当に金正喜のことを理解していないというのである³³⁾。これは、前述したように芸術界や藤塚の研究が金正喜を特定の分野に絞って注目していることを指摘したものである。

特に、鄭寅普が書いた「阮堂先生全集序」にはそのことが良く表われている。

今公没且八十年、世故多変、而談者猶知公之為足重尋其所繇、概以公書芸稍進焉、則謂公考摛為得清翁方綱、阮元之緒。……弱冠、隨父使燕、交翁・阮、嗣後往復至繁。世見其然也、遂以為自此得之、不知其早伝自家庭師友、不待是而後得也。夫以公之深契本原、徒以書芸考摛重、抑淺矣。於其

29) 葛城末治「朝鮮金石学概論」（『青丘学叢』第一四号、青丘学会、1933年）155頁。

30) 「金阮堂、宋時烈先賢碑閣建立」（『東亞日報』1933年2月22日）3面。

31) 李瀾（号星湖、1681-1763）の文集。すでに、朝鮮後期の学者安鼎福（1712-1791）が李瀾の著作『星湖僊説』を整理して『星湖僊説類選』を編纂した。これを基にして1915年朝鮮古書刊行会で『星湖僊説』上・下が刊行されたが、鄭寅普により新たに校閲され、文光書林から『星湖僊説』が出版された。

32) 朝鮮学運動の時期と範疇についてはいくつか説があるが、安在鴻（1891-1965）、鄭寅普（1893～不明）などによる『與猶堂全書』（新朝鮮社）の刊行計画と関連され1934年9月に開催された「茶山逝去99周年記念事業」をきっかけとして全面化された（백승철「1930년대 '朝鮮学運動'의 전개와 民族認識·近代觀（1930年代「朝鮮学運動」の展開と民族認識·近代觀）」『歴史与実学』36、歴史実学会、2008年、119頁）。

33) 原文は次のようである。「雖然世之稱先生者、特舉其一藝、而曰筆家之雄而已、攷據之贍而已。自許以知之深者、亦不過曰詩工精悍、文亦簡潔、拔乎俗下之窠臼、而躋乎古人之堂奧。如是焉已矣、則烏可謂真知先生者哉」（金甯漢「阮堂先生全集序」『阮堂先生全集』1934年）。

書与学、亦第漫然重之、其能得其真者幾人哉³⁴⁾。

鄭寅普は、近代期韓国における漢学者・歴史学者・教育者として活動した人物である。延禧専門学校、協成学校、仏教中央学林などで漢学と歴史学を講義した。彼は前述した朝鮮学運動を主導し、朝鮮後期の実学研究者の文集刊行にも積極的に参加していた。編纂者の金翊煥が鄭寅普に序論を委託したのも、そのような彼の学問的背景と傾向を考慮したからであろう。

序文からわかるように、鄭寅普は金正喜と清朝儒学者との関係をあまり評価していないようである。彼が「徒以書芸考拋重、抑浅矣」と指摘したのは、翁方綱や阮元などの清朝学者との関係の中で金正喜を位置づけようとした藤塚を念頭においた発言だと思われる。金正喜作品の展示会を開き、金正喜に関する資料を必死に集めていた京城帝国大学教授、藤塚のことについて鄭寅普を含む当時の知識人たちは知っていたはずである。

このような鄭寅普の反応は、日本人研究者による研究に対する不信から呼び起こされたものと思われる。特に、1920年代は朝鮮の儒学は中国の亜流に過ぎない（朝鮮儒学不在論）という考え方が、高橋亨に代表される日本人学者たちによって主張されていた時期でもあった。鄭寅普は、阮元・翁方綱からの影響のみ強調され、金正喜の学問世界が中国の継承にすぎないと低く評価されることを恐れていたであろう³⁵⁾。

その翌年の1935年、藤塚は「阮堂集及び阮堂先生全集の検討」（『青丘学叢』21号、青丘学会）を発表し、『阮堂先生全集』を書評すると同時に、『阮堂集』と『阮堂先生全集』に見られる誤謬について指摘している。藤塚は、金正喜の自作ではない文章がこの二種の詩文集には収載されていることを明らかにし、これらの誤謬について甚だしく遺憾を感じると述べている³⁶⁾。一方、序文については「阮堂の学問人物と、本書編纂の来歴が明瞭にされて居る」と述べ、全集の刊行についても「従来阮堂集を入手し得なかった人々の渴望は、本書の編刊によって始めて満たされた上に、更に多くの資料を提供された訳で、阮堂研究上は勿論、広く半島学界に貢献することの少からざるを認めざるを得ない」³⁷⁾と評価した。しかし、この論文に対して、金翊煥や金甯漢、鄭寅普がどのように反応したかについては今のところ不明である。

四、韓国儒学史叙述の中の金正喜

前述のように、金正喜の多才な学問・文芸に注目する研究は1930年頃から始まっていた。特に藤塚は、

34) 鄭寅普「阮堂先生全集序」（『阮堂先生全集』、1934年）。

35) 鄭寅普は植民地史学に反発して歴史研究に取り組み、日帝による出版事業の成果を無視し、改めて朝鮮人による出版を試みた（김진균「성호 이익을 바라보는 한문학 근대의 두 시선-1929년 문광서림판『성호사설』에 게재된 변영만과 정인보의 서문 비교 연구-（星湖李瀾をみる漢文学近代の二つの視線）」『泮矯語文研究』28、泮矯語文研究会、2010年、230頁）。

36) 藤塚鄰「阮堂集及び阮堂先生全集の検討」（『青丘学叢』第21号、青丘学会、1935年）110頁。

37) 藤塚鄰「阮堂集及び阮堂先生全集の検討」（『青丘学叢』第21号、青丘学会、1935年）110頁。

膨大な資料に基づく長年の研究から、金正喜を清朝考証学の大家として位置づけた。本章では、このような藤塚の研究とその後の議論を中心として、近代韓国儒学史の中で金正喜がどのような存在として認識され、どのように評価されていたかを検討してみたい。

1. 張志淵の『朝鮮儒教淵源』

韓国最初の儒学通史と知られているのは、張志淵（1864-1921）の『朝鮮儒教淵源』（1922年）である。張志淵は、皇城新聞社の社長、慶南日報の主筆などを歴任した言論家である。同書は、毎日新報に1917年から連載した「朝鮮儒教淵源」を、子の張在弼が1922年に3巻1冊の単行本として刊行したものである³⁸⁾。

張志淵は、箕子を東方儒学の始まりとし、新羅時代から近代に至るまでの儒学史について、儒学者を中心に叙述している。ここにとり上げられた儒学者だけでも200名余りにのぼる。しかし、その多数の儒学者の中に、金正喜の項目はない。金正喜の師である朴齊家についても、李德懋の項目で名前に触れているだけで、詳しい言及は見当たらない。ただ、柳馨遠（1622-1673）、丁若鏞（1762-1836）、朴趾源（1737-1805）洪大容（1731-1783）、李德懋（1741-1793）などを経済と考証の学を兼ねた儒学者であると評価している³⁹⁾。つまり張志淵は朝鮮儒学史を叙述する際、金正喜を考証学の大家であったことはもとより、朝鮮後期を代表する儒学者の一人としても認識していなかったことがわかる。

2. 高橋亨の朝鮮儒学研究

この時期に日本人によって書かれた代表的な朝鮮儒学史として、京城帝国大学の教授であった高橋亨の「朝鮮儒学大観」（『朝鮮史講座』、朝鮮史学会、1924年）⁴⁰⁾と「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」（東京帝国大学博士論文、1929年）を挙げることができる。高橋亨は四十余年にわたって韓国に滞在し、主に総督府から任務を与えられ、教育者・研究者として活動した人物で、1902年東京帝国大学漢学科を卒業し、1904年（27歳）に渡韓した。1926年、京城帝国大学が開設されるとその教授となり、法文学部「朝鮮語学・朝鮮文学第一講座」を担当した。帰国後（1946年）は、天理大学を拠点として「朝鮮学会」を創設している⁴¹⁾。

高橋は総督府の嘱託として全国を調査していた時に韓国儒学に興味を持ち、活発に研究を進めた。その「朝鮮儒学大観」は、張志淵の『朝鮮儒教淵源』と比較されることが多い⁴²⁾。高橋の朝鮮儒学史叙述の

38) 張志淵著・李民樹訳『朝鮮儒教淵源』（明文堂、2009年）を参照。

39) 張志淵著・李民樹訳『朝鮮儒教淵源』、439頁。原文は「以上自柳磻溪丁茶山朴燕岩洪湛軒李雅亭諸公特以儒教兼經濟考摭之学実漢儒學術也」

40) 1912年に『朝鮮及満洲』に連載された「朝鮮儒学大観」（第50-52号;第 58・62・64号）に修正を加えて『朝鮮史講座』に再録されたものである。この書は韓国の儒学者を中心に韓国の儒学史を体系的に述べている。

41) 李晚辰「京城帝国大学における高橋亨とその学術活動」（『千里山論文集』第85号、関西大学大学院文学研究科、2011年3月）

42) 張志淵の『朝鮮儒教淵源』の執筆動機は、「朝鮮儒学大観」の歪曲に対する批判から始まったといわれている。二つの朝鮮儒学史を比較している論文としては、이승률「日帝時期 韓国儒学思想史著述史에 관한一考察」（『東洋哲学研究』第37輯、東洋哲学研究会、2004年）、이동희「張志淵의『朝鮮儒学淵源』의 特徵에 대하여 ——高橋의「朝鮮儒

特徴は、朝鮮儒学を「主理」と「主気」という二つの概念に分類し記述する点にあり、このような区分は博士論文の「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」で完成された。高橋の主理・主気の区分は、阿部吉雄や裴宗浩に継承され、後の韓国儒学史研究に大きな影響を与えることになる。

しかし高橋は、朝鮮の儒学は朱子学単一体制に他ならないと断定し、他の学派の存在は認めていない。そのため、張志淵が経済学者と認識した柳馨遠や丁若鏞の存在も純粹儒学者以外の類型に属すると述べるだけで、詳しいことは述べていない。また、金正喜についての言及も見当たらない⁴³⁾。

ところで、高橋は藤塚の東京帝国大学時代の先輩にあたり、京城帝国大学時代の同僚でもあるため互いの研究については熟知していたはずである。そのような事情をうかがわせる資料として、1935年の「朝鮮の儒教」がある。ここで高橋は「清朝風の経学」について次のように述べている。

彼等から観れば清朝の漢学如きは一種の訓詁之学に過ぎない。如何に之を究めても道を明めるに於て糸毫の成果を齎さない。朝鮮の諺に水瓜の皮を嘗るといふがある。訓詁学并に漢学は学者をして一生水瓜の皮を嘗めて中の滋味を食はざらしめるものである。清朝風の経学が正祖以後漸く将来せられしに拘らず終に思想として朝鮮に勢力を得るに至らざりし所以は此に在る。丁茶山の優れた漢学的著述も今日となりて始めて学者の注意を惹くに至ったのである⁴⁴⁾。

この論文が書かれた1935年には、すでに藤塚がいくつかの金正喜研究論文を発表しており、『阮堂先生全集』が出版された後でもあった。高橋は、これ以前の著作では、朝鮮の儒学は朱子学一辺倒であったと述べていたのに対して、清朝経学が正祖時代から朝鮮儒学史に入ってきたことを指摘し、丁若鏞についても高く評価している。これは高橋が、藤塚の研究成果や当時の朝鮮学運動の出版物⁴⁵⁾を知っていたことを意味するものであろう。ただ、高橋は清朝経学および丁若鏞の存在を例外として扱い、当時朱子学中心の儒教社会に与えた影響は微弱であると述べてあり、韓国儒学を見る基本的認識に変化はなかったと見られる⁴⁶⁾。

3. 玄相允の『朝鮮儒学史』

朝鮮儒学史の中で金正喜が本格的にとり上げられたのは、筆者の知る限り、玄相允（1893-?）の『朝

学大観」 対의 比較」（『韓国学論集』第35輯、계명대학교 한국학연구원, 2007年）などを参照されたい。

43) 高橋亨「朝鮮儒学大観」（『朝鮮史講座』、朝鮮史学会、1924年）。高橋亨著、川原秀城・金光來編訳『高橋亨 朝鮮儒学論集』（知泉書館、2011年）に収録。

44) 高橋亨「朝鮮の儒教」（『朝鮮』第239号、朝鮮総督府、1935年）37頁。

45) 1934年から1936年にかけて金誠鎮・鄭寅普・安在鴻が丁若鏞の著作をまとめた『与猶堂全書』（新朝鮮社）が出版された。

46) このような韓国儒学史に対する高橋の態度は、戦後に一定の変化が見られる。「朝鮮の陽明学派」（『朝鮮学報』第4輯、1953年）や「丁茶山の大学経説」（『天理大学学報』、1955年）など朱子学以外の分野についての論文をいくつか発表した。また、「朝鮮の公平学派李白雲」では、明の陽明学が明宗・宣宗時代に伝えられたことと、正宗・純祖・憲宗時代に清朝の漢学が申綽・丁若鏞・金正喜等によって述べられて考据学派的著作が残されていることを言及し、朝鮮時代における陽明学や考証学の存在を肯定している（『朝鮮学会会報』第21号、1954年、2頁）。

鮮儒学史』(民衆書館、1949年)が最初である。玄相允は伝統的漢学の家系に生まれ、1914年に早稲田大学に留学、史学と社会学を学んだ。戦後は京城大学の予科部長、高麗大学の初代総長になるなど教育家として活躍した。総長に就任した後、みずから朝鮮思想史を講じ、その講義が『朝鮮儒学史』として出版されたのである。この書物は、高橋の「主理」「主気」の区分を借用して朝鮮後期の性理学を検討し、張志淵の『朝鮮儒教淵源』よりも学術的に充実し、進歩した韓国儒学史となっていることは定評がある⁴⁷⁾。

ここで玄相允は、金正喜を経済学派として分類している。以下に挙げるのは『朝鮮儒学史』の目次の一部である。

第12章 経済学派の出現と風動

第一節 経済学派の台頭とその原因

第二節 経済学派の学風

第三節 経済学派の勢力とその代表者

1. 金堉、2. 柳馨遠、3. 李瀾、4. 安鼎福、5. 申景濬、6. 丁若鏞、
7. 朴趾源、8. 洪大容、9. 李德懋、10. 朴齐家、11. 魏伯珪、12. 金正喜

この目次からわかるように、張志淵と金台俊が「経済の学」と称した人物について、玄相允は「経済学派」と名付けたうえ、さらに多くの儒学者を紹介している。それでは、この「経済の学」とは、どのような学問を指すのであろうか。玄相允はこれについて「第二節 経済学派の学風」で次のように定義している。

① 利用厚生之道と經国済民の術に力をつくしたもの。経済学派は孔孟の政治を行うことを実践の目標として、主に經国済民の学問に力をつくし、これが経済学派または実学派と称される所以である。そして、礼楽刑政はもちろん、殖産興業と利用厚生に関する一切の経済的学問に尽力し、研究することが彼らの学風であった。

② 朝鮮の実情研究。経済学派は楽土朝鮮を作るためには、まず朝鮮の実情を調査研究するべきだと考えていた。そして、彼らは朝鮮の歴史と地理と物産風土を研究の課題とした。このような内省的・自主的研究の出現は朝鮮学風の新しい特色にほかならない。

③ 北学論の主張。経済学派は朝鮮に理想的仁政を行なうために、深く朝鮮の実情を研究調査すると同時に、また外国の制度文物と学術の中で、我より優秀で進歩・発達しているものがあれば、広くそれを輸入して模倣しようとした。そして、そのためには当時の西洋諸国の新文明を比較的多く輸入し、すべての文物が他の東方諸国より進歩していた中国の清国の文化を学ぶことを主張した。

④ 考証学の研究。経済学派はまた中国の清国の学問の影響を受け、考証的学問を研究したが、

47) 尹絲淳「한국유학사상 서술의 과제와 의의 (韓国儒学思想の叙述の課題と意義)」(『国学研究』第3集、韓国国学振興院、2003年) 16頁。

これも彼ら経済学風の一異彩であった⁴⁸⁾。

ここで玄相允も述べたように、「経済学派」は「経世の学」と重なる意味をもち、また「実学派」というのとはほとんど同様である。すなわち「経済の学」とは現在のいわゆる「実学」と呼ばれるものの相当することがわかる。さらに、その定義の最後に考証学の研究を加えているのは、金正喜を意識していたためだと思われる。玄相允は、経済学派の最後の人物として金正喜を挙げ、次のように評価している。

弱冠にして百家の書に貫徹し、さらに十三経にを修め、二十四歳の時に父に従って燕京に入り、当時一代の鴻儒であった阮元・翁方綱と経義を弁論し、やがて莫逆の友となった。

かつて「実事求是説」を著わし、学者がもし実事に従事せず空疎の術に便乗し、その是を求めずただ観に従ったら聖賢の道に背馳せざる者——ないはずである。その所以『実事求是』は学問の崔要の道と言ひ、左のように論じた。……そのゆえ、彼は実事求是の方法はまずは訓詁を精求し、その次は実践躬行に尽力することにあると力説したのである。また彼は書法に長じ、その名が天下に高かった⁴⁹⁾。

玄相允は、金正喜について大きく三点から評価している。考証学者、実事求是説の提唱者、書家がそれである。このような評価は張志淵や高橋の儒学史叙述には見られないもので、1930年代の金正喜研究を参考にしていることがうかがえる。特に、中国の学者との関係を述べる部分や、実事求是説を取り上げることなどの点を見ると、藤塚の研究と『阮堂先生全集』を反映していることがわかる。

以上のように、1910年代と20年代の儒学史著作では、金正喜はさほど注目されていなかったことがわかる。しかし、玄相允の『朝鮮儒学史』に至ると、主要な韓国儒学者の一人として紹介されることになる。また、時期的に後になるが、李丙燾（1896-1989）が1959年に草稿を執筆し、1986年に出版した『韓国儒学史略』（亜細亜文化社）にも、金正喜は重要な儒学者として記述されている⁵⁰⁾。すなわち、藤塚の金正喜研究および朝鮮学運動の雰囲気、さらに『阮堂先生全集』の刊行という一連の動きを通じて、金正喜が韓国儒学史の中に位置づけられたのである。

48) 玄相允『朝鮮儒学史』（民衆書館、1949年）323-324頁（原文は韓国語）。

49) 玄相允『朝鮮儒学史』（民衆書館、1949年）366-367頁。原原文は次のようである。

「거우 弱冠에 百家의書에 貫徹하고 더욱十三經에 用力하더니, 二十四歲時에 父가 燕京에使함에 父를따라 燕京에드러가 當時一代鴻儒인 阮元 翁方綱으로더부터 經義를弁論하고 드디어 莫逆의友가 되었다. 일즉이「実事求是説」을 지어 学者 만일 實事를 일삼지아니하고 空疎의術을便하다하며 그 是한것을 求하지아니하고 다만 先入으로써 為主하면 聖賢의道에 背馳치안는者——없을것이니 그런가답으로『実事求是』는 學問崔要의 道라하여 左와같이 論하였다. ……그리하여 그는 實事求是의方法은 첫재訓詁를精求하고 그다음은 實踐躬行을 힘쓰는데 있다고 力說한것이였다. 그리고 그는 書法에長하여 일홈이天下에 높았다」。

50) 李丙燾『韓国儒学史略』（亜細亜文化社、1986年）、294-298頁。

おわりに

本稿では、近代期に行なわれた藤塚の金正喜研究と『阮堂先生全集』刊行が、後世の金正喜理解にいかなる影響を与え、また金正喜に対する認識がどのように展開したのかを考察した。

金正喜は、生前の朝鮮後期にはすでに文章家・書家として広く知られており、さらに清の著名な儒学者と交流した経学と金石文の大家であった。現在韓国においても、彼の著述と書については高い評価と権威が与えられている。しかし、著作をあまり残さなかったことに加え、著述も儒教から仏教にまでわたっているため、金正喜の学問を統括的に定義・評価するのは難しいとされている。そのため、彼の死後『阮堂尺牘』『覃擧齋詩藁』『阮堂集』の文集が出版されるが、書家や多才多能な人物といった漠然とした評価が散在していた。

このような評価を転換させたのが京城帝国大学の支那哲学講座の教授であった藤塚鄰であった。藤塚は金正喜の考証学者としての姿を明らかにすべく研究に取り組んだ。膨大な資料の収集と、中国の清朝考証学についての豊かな知識を生かして、金正喜を清朝文化東伝史における核心的人物として位置づけた。藤塚の研究は、金正喜を初めて近代的学問の研究対象として客観視したものであった。藤塚の研究とはほぼ同時に、芸術界でも金正喜に注目し、その書体と文人画を高く評価する動きも生じた。

このような学界・芸術界の状況と朝鮮学運動の雰囲気が高まる中で、1934年『阮堂先生全集』が出版された。鄭寅普は序文において、藤塚の金正喜研究とそれからもたらされた世間の金正喜認識について反論し、『阮堂先生全集』の出版によって金正喜を総合的に理解することを望んでいた。また、藤塚もそれについて同意していた。このような藤塚の研究や『阮堂先生全集』の刊行などの努力に基づき、韓国儒学史の中でも金正喜の存在が認識され始めた。1917年の張志淵『朝鮮儒教淵源』には登場しなかった金正喜が、1949年の玄相允『朝鮮儒学史』には重要な学者としてとり上げられたのである。ただし、「朝鮮儒学不在論」を主張した高橋亨のように、金正喜の存在を一つの例外として扱う研究者もいないわけではなかった。

金正喜は、近代期において日韓の学者たちの中でさまざまに論じられ、出版物を通じて論議が行われていた。その一連の動きから、同じ時代と空間を共有していた日韓の研究者たちの認識の差と学問的背景の差をみることもできる。金正喜の研究とその評価は、そのような両国の学術的交流と衝突の結果生み出されたものであったといえよう。